



ほり
こと

スクールソーシャルワーカーだより

こと ほりかわしげとし

46

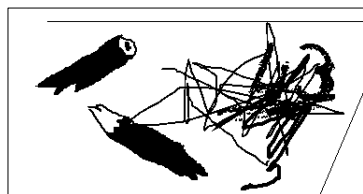
自尊心 の巻 ☆

『学校環境、親子関係が子どもの自己否定感に与える影響』

東京大学教育学部・白川由梨先生

中・高校生の65%が「自分はダメな人間」と考えているという調査結果(2009)を受け、自己否定感を軽減する方法に関する報告で、その結論は…

『先生が積極的に話しかける事はどの子においても自己否定感を軽減する。さらに、学力上位の子は親からほめられる事が、学力下位の子は親とスポーツや余暇を楽しむ事が効果的である。しかし、参加型授業(アクティブ・ラーニング)では軽減されない。』というものでした。



ここで考えたいことは、テストについてです。テストの目的は、学習効果を計るもの。結果を基に先生は指導を考え、子どもは自らの学習を振り返る材料とするためのものでしょう。ところがいつの間にか、点数=その子の「努力の評価」、さらには人物評価の基準となってしまうはいないでしょうか。

白川先生の研究では、本人とおとなとの良好な人間関係が大事だと結論しています。

今度は、福祉的視点でこの事を考えると、もしも、カツオやのび太と違い、本人の努力だけでは対処できない状況にあるのに、先生や家族が、子どもの努力不足と決めつけ「勉強しなさい」と非難するとしたら、それは人権問題です。

さらに言うと、テストの成績が良い子は優秀で、成績が悪い子は劣っているという捉え方が、実は差別的な見方なのですが、あまり気付かれていません。悲しい事です。テストは、その人の能力の一部しか計れず、テストの点数で人物を評価する風潮は、間違っていないでしょうか。



子どもは絶えず『正解する事』を求められ、評価を受け続けます。どんな子どもでも、出来ない事があるほど、自己否定感を強くします。さらにおとなから、成績がすべまであるかのような叱り方を受けると、もっと自己否定することでしょう。

元来、評価とは、何かと比較することです。子どもを評価するのは、「おとな」です。ストレスに耐え切れなくなった児童生徒の多くは、図書室、保健室、事務室…評価しないおとなが居る場所を訪れます。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーもまた、自分を評価しない人と受け入れられた時、子どもは自分の困り事を話し始めます。

子どもの将来への夢は、おとなのように現実的である必要は、ないかもしれません。

子どもと楽しい時間を過ごすことが、子どもを育みます